

【阿修羅】 あしゆら(その1)

映画『太陽がいっぱい』『ティファニーで朝食を』には共通点があるようです。

資産家の友人を殺害し当人になりすます陰気な男、愛など信じない娼婦というダーティーな主人公を、アラン=ドロン、オードリー=ヘップバーンという世紀の美形が演じることにより原作(小説)を離れ、罪がおぞましくも、悪が憎らしくもならない、感触の良い作品に仕立てられているのです。

悪行・愚行をこのように美しく演じることができるのは、そもそもこの世の善と悪がさほどかけ離れてはいないことを物語っているのではないのでしょうか。

インド神話に登場する阿修羅(Asura)は、干ばつをもたらす太陽神・好戦的な神として悪名を轟かせています。わけても帝釈天との戦いは「修羅場」という言葉を生むほど凄まじいものでした。六道のひとつ「修羅道」(争いの絶えない世界)も同根からの名称です。

興味深いことに、悪神であるはずの阿修羅は地域によっては恵みをもたらす太陽神であり、仏に帰依しては仏法を護る天部にも加えられ、必ずしも悪を貫いているわけではありません。

善悪の曖昧な神は阿修羅に限らず訶梨帝母[かりていも]など数例知るところです。

訶梨帝母(=鬼子母神)は子供を守る母性の神格ですが、その起源は産んだ我が子を次々と食ってしまう恐ろしい鬼神なのです。

訶梨帝母のこの二面性に母性の本質があると指摘したのは、先ごろお亡くなりになりましたユング心理学者の河合隼雄氏でした。

氏によれば母性は子育ての根幹となる愛情ですが、世話をやき過ぎると子は自分でできることすら行う機会を失います。そうした過保護は子の自立を妨げ、手足をもぎ食ってしまうに等しいというのです。

阿修羅は怒りを神格化した神です。怒りは暴力につながりやすく、阿修羅が悪神に属することは誰しもが納得するところでしょう。

しかし、怒りは新しい時代を創造する契機になることもあるようです。

1789年フランス市民によるバスチーユ牢獄襲撃事件は暴動と非難すべきなのか、市民革命と賞賛すべきなのか。第二次世界大戦中、ナチス占領下のヨーロッパで繰り広げられた市民の抵抗運動はテロリストと非難すべきなのか、レジスタンスと英雄視すべきなのか。今となっては、答えは明らかでしょう。

圧政に対する民衆の怒りが社会変革の契機となった例は数えるに暇がありません。

アジアの神話に登場する悪神は決して滅ぼすべきものではありません。悪とは体制に属さない身分・無尽蔵の活力を意味し、害ともなれば益をももたらすのです。

子を食う鬼神 訶梨帝母・怒りの神 阿修羅が善神にもなりえる理由がここに 있습니다。

どうやら善と悪は対義語でありながら、交錯しやすい性質のようです。両者はそれほどかけ離れた存在ではないからこそ、人は常に反省と修正を繰り返す必要があるのでしょう。

一休宗純の筆でおなじみの「諸悪莫作 衆善奉行」(しょあくまくさ しゅうぜんぶぎょう)という偈は「悪いことはしてはいけない 善いことをしなさい」という意味ですが、簡単なようでなかなか難しいことのようにです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~